

悪いうさぎ

「悪いうさぎ」は、若竹七海さんの小説の題名です。

物語を紹介しますと、葉村晶という独身の女探偵が主人公です。彼女は、行方不明の女子高校生捜しを依頼され調査を進めていくと、他にも姿を隠した少女がいることが分かります。この少女達がどこに消えたのか真相を探る内に、少女達にうさぎの格好をさせ、そのうさぎ達を狩猟するという殺人ゲームに巻き込まれていきます。主人公もうさぎの格好をさせられ危うく殺されそうになるという、かなりハードボイルドなサスペンスというところでしょうか。

実は、私がこの本を手にした動機は、本の題名にあります。「うさぎ」というのは、大体が可愛いものという印象しか持っていませんでしたから、「悪いうさぎ」という表現に興味を湧いたのです。

小説の中で、こういう場面が出てきます。

主人公と依頼人のミチルという女子高校生が武州郷土公園に行くと、びっくりするほど大きな「白いうさぎ」が、狭い檻に入れられてふて腐れています。

公園管理の年配の男が、野菜くずを檻の中の「うさぎ」の鼻先につき出すと、その「うさぎ」は、おっくうそうに臭いをかぎ、ぶすっとして、キャベツの芯をかじります。その様子を見ていた二人は、年配の男に「おじさん、ねえ、そのうさぎ、どうして檻に入れてるの」と聞くと、男は、まじめくさって「ああ、こいつはね、悪いうさぎなんだよ」と答えます。

主人公は、いわれてみればなるほど如何にも悪そうな顔をしている。きっと、牝うさぎを端から襲っては、ぼこぼこ子を生ませているのだろう、と想像し、「どんな悪いことをしたのさ」と聞きます。すると男は「足が悪いんだよ」。

もう二人は、脱力し沈黙するしかありません。

この場面を読んで感じたことは、こういう勘違いやすれ違いは、我々の日常生活の中に幾らでもあるだろうということです。

その原因は、私たちは、ものを考えるとき、予め与えられた条件に左右されやすいということにあります。

主人公の勘違いがどこで起こったか、皆さんは良くお分かりのことと思います。

まず「白いうさぎ」という言葉から来るイメージがあります。これは、白い毛がふさふさしていて、赤い目が可愛い、多分そんなポジティブな印象を持たれる方が多いと思います。その可愛い「うさぎ」が「檻に入れられ、ふて腐れている」というのですから、これは何か相当のことがあるのかなと思いますよね。

そこで「このうさぎは悪いうさぎ」だといわれると、主人公でなくても、この「うさぎ」はかなりのワルなんだ、だから隔離されているんだ、と納得してしまいます。

しかし、もし最初にこの「うさぎ」は足が悪いので、仕方なく檻に入れているという情報を与えられたとしたらどうでしょう。足が悪いので、他の動物から虐められないよう守るために檻に入れているのかな、とか、ふて腐れて見えたのも、身体が不自由で、落ち込んでいるのかな、というように感じ取ったかも知れませんが。少なくとも、「牝うさぎを端から襲っては、ぼこぼこ子を生ませているのだろう」とは思わないに違いありません。

私たちは、与えられた情報から色々なことを分析し、判断していきますから、その情報が間違っていたり、偏っていれば、私たちの判断自体も間違ったり偏ったりしてしまいます。どんな情報の下でも、正しく判断し、行動できる人は、ほとんどいないのではないかとさえ思います。

とすれば、私たちは、一つの情報だけに頼らないこと、与えられた情報に対しても無条件で受け入れないという慎重さが求められます。そのためにも、ウイングを広げ、幅広い角度からものを見、考えていくことが必要でしょう。

少なくとも初めから、「これしかない」、「これが絶対正しい」などと、鎧を着てものを考えることだけは避けるべきです。（塾頭 吉田 洋一）